

全教科・新課程実施 “基幹3教科”平均点合計(600点満点)

# 「国語+数学(I・A+II・B)+英語」は、 6.1点アップの347.2点(得点率 57.9%)!

- 国語+10.2点、数学I・A-6.0点、数学II・B+8.6点、英語-6.7点。
- 数学・理科の「経過措置」(旧科目受験)なく、各新科目の受験者大幅増。
- 理科の「基礎科目」受験選択率 28.4%、「発展科目」選択率 46.7%。

旺文社 教育情報センター 28年2月

28年センター試験は、前年先行実施された新課程「数学・理科」に続いて、全教科・科目が新課程に対応して実施された。前年は数学・理科で、既卒者は旧課程科目も受験できる「経過措置」が講じられたが、今回から通常の実施となった。志願者56万3,768人(対前年比0.8%増)、受験者53万6,828人(同1.2%増)で、ともに3年ぶりに増加した。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、過去のデータも含めてセンター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

## ■「教科・試験枠」別の受験選択率

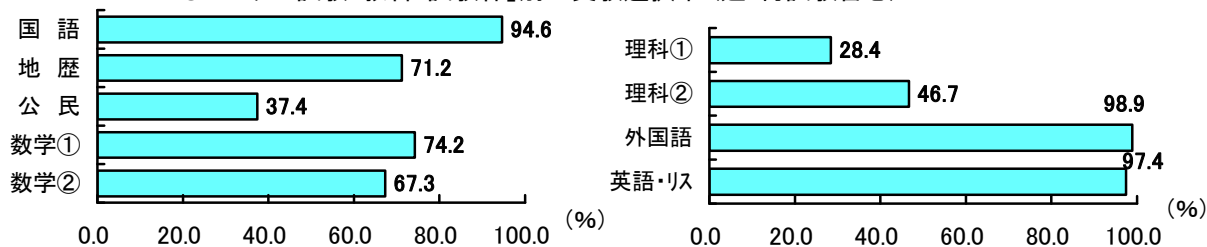
◎ 各「教科・試験枠」別の受験者数の全受験者数(53万6,828人。追・再試験含む実数)に占める割合(受験選択率=各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100)をみってみる。

例年、センター試験(以下、セ試)受験者のほとんどが受験する外国語(筆記)受験者は53万748人で、受験選択率は98.9%、英語のリスニングは97.4%。国語は94.6%であった。

新課程セ試で大きく変わった「理科」の科目構成は、理科4領域において、それぞれ「基礎を付した科目」(標準2単位:以下、「基礎科目」)4科目と「基礎を付していない科目」(標準4単位:以下、「発展科目」)4科目の計8科目からなる。「基礎科目」は理科①の試験枠に配置され、「発展科目」は理科②の試験枠に配置されている。

新課程2年目の理科①(基礎科目)の受験者数は約15万人で、セ試全受験者数に占める受験選択率は28.4%/理科②(発展科目)の受験者数は約25万人、受験選択率46.7%である。「基礎科目」の受験者数は前年より大幅に増え、受験選択率もアップしたものの、受験選択率は前年に引き続き、全「教科・試験枠」中で最も低かった。

●センター試験「教科・試験枠」別の受験選択率(追・再試験含む)



注. ①「教科・試験枠」別の受験選択率=各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100。  
 ②各「教科・試験枠」の受験者数は実受験者数。全受験者数は536,828人。  
 ③理科①は「基礎科目」、理科②は「発展科目」。/ ④外国語は英語を含む筆記試験、「英語・リス」は英語のリスニング。

## ■ 基幹3教科の平均点合計

◎ セ試平均点には地歴、公民、理科「発展科目」における各科目の「第1解答」(100点満点)と「第2解答」(100点満点)の得点、理科「基礎科目」(50点満点)の“2科目受験必須”の得点が混在し、それらの教科における各科目の平均点の実態は把握しにくい。

そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した。

国語／数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)／英語の平均点合計(600点満点)は、次のとおりである。

**国語＋数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)＋英語＝347.2点**

<前年差：＋6.1点、得点率57.9%>

## ■ 「5教科6科目」の加重平均点

◎ 国公立大受験のセ試科目の標準の目安となる、文系・理系に共通な「5教科6科目」(国語／地歴・公民<合わせて1科目>／数学<数学①と数学②の2科目>／理科<理科①・理科②合わせて1科目>／外国語)の加重平均点(800点満点)を算出した。

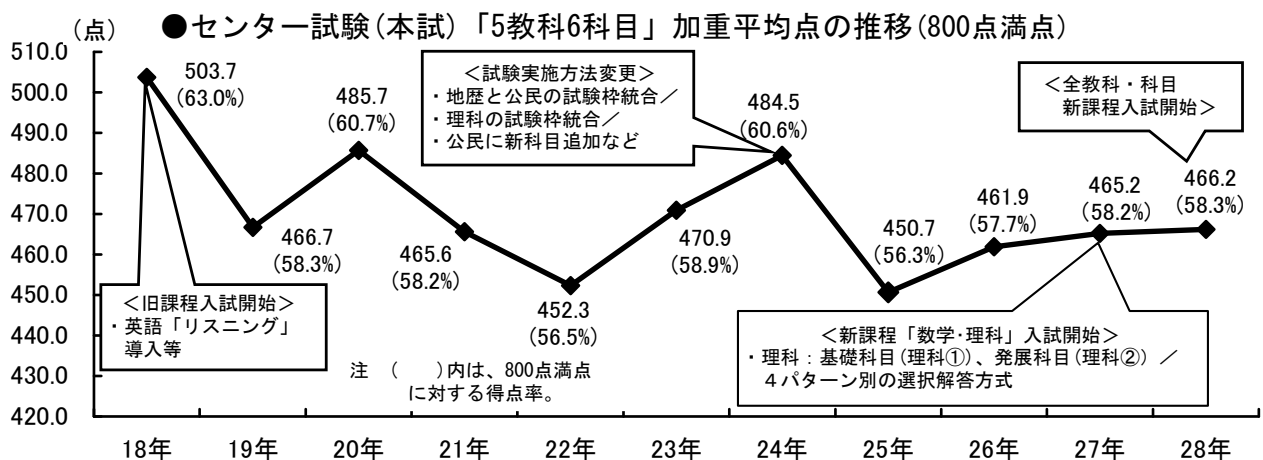
28年の結果は、次のとおりである。

**「5教科6科目」(800点満点)＝466.2点**

<前年差：＋1.0点、得点率58.3%>

これまでのセ試「5教科6科目」の加重平均点の推移をみると、学習指導要領改訂に伴う出題教科・科目や内容等の変更、実施方法の変更などの初年度は、概して平均点は高めになる傾向がある。

前回の新課程入試(18年。英語にリスニング導入など)の「5教科6科目」加重平均点は503.7点(800点満点：得点率63.0%)と、この10年間では最も高い。24年の実施方法等の大幅変更(地歴・公民、理科の試験枠統合、公民に新科目設置など)の際は、484.5点(同60.6%)であった。27年の新課程「数学・理科」入試開始では、理科の実施方法が複雑・多様化され、平均点は465.2点(同58.2%)に留まり、さほど上昇しなかった。



注. 大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数(本試験。理科「基礎科目」は追・再試験含む)から算出。国語(200点満点)の平均点／地歴と公民を合わせて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)／数学①の加重平均点(100点満点)／数学②の加重平均点(100点満点)／理科①と理科②の加重平均点(100点満点：「基礎科目」<50点満点>は2科目受験者<100点満点：追・再試験含む>の加重平均点)／外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。18年と27年は旧課程対応の「経過措置」科目(旧課程科目)含む。27年は「得点調整」後の平均点。

## 平成28年度 大学入試センター試験(本試験) 平均点等一覧[確定]

<平成28年2月4日 大学入試センター発表>

教科	科目	平成28年		平成27年		前年差			
		受験者数	平均点	受験者数	平均点	受験者数	平均点		
<b>基幹3教科 平均点合計(600点満点)</b> 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		— (得点率)	<b>347.2</b> 57.9%	— (得点率)	341.0 56.8%	— (得点率差)	<b>6.1</b> 1.0(ポイント)		
国語(200点)		国語		507,791	129.4	501,415	119.2	6,376	10.2
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,449	42.1	1,376	47.4	73	▲ 5.3	
		世界史B	84,131	67.3	84,053	65.6	78	1.6	
		日本史A	2,472	40.8	2,409	45.6	63	▲ 4.8	
		日本史B	160,830	65.6	155,273	62.0	5,557	3.5	
		地理A	1,805	52.1	1,843	51.4	▲ 38	0.7	
		地理B	147,929	60.1	146,846	58.6	1,083	1.5	
	公民(100点)	現代社会	80,240	54.5	76,698	59.0	3,542	▲ 4.5	
		倫理	26,039	51.8	30,740	53.4	▲ 4,701	▲ 1.6	
		政治・経済	49,184	60.0	45,300	54.8	3,884	5.2	
		倫理、政治・経済	48,709	60.5	48,659	59.6	50	0.9	
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	5,981	36.5	5,277	32.4	704	4.1	
		数学Ⅰ・数学A	392,479	55.3	338,406	61.3	54,073	▲ 6.0	
	数学②(100点)	数学Ⅱ	5,782	27.8	4,944	23.8	838	3.9	
		数学Ⅱ・数学B	353,423	47.9	301,184	39.3	52,239	8.6	
		簿記・会計	1,401	57.7	1,266	66.5	135	▲ 8.8	
		情報関係基礎	539	56.2	462	52.0	77	4.3	
		工業数理基礎	4	54.3	35	55.0	▲ 31	▲ 0.8	
理科	理科①(50点)	物理基礎	18,304	34.4	13,289	31.5	5,015	2.9	
		化学基礎	105,937	26.8	88,263	35.3	17,674	▲ 8.5	
		生物基礎	133,653	27.6	116,591	26.7	17,062	0.9	
		地学基礎	47,092	33.9	41,617	27.0	5,475	6.9	
	理科②(100点)	物理	155,739	61.7	129,193	64.3	26,546	▲ 2.6	
		化学	211,676	54.5	175,296	62.5	36,380	▲ 8.0	
		生物	77,389	63.6	68,336	55.0	9,053	8.6	
		地学	2,126	38.6	1,992	40.9	134	▲ 2.3	
外国語(200点)	英語	筆記(200点)	529,688	112.4	523,354	116.2	6,334	▲ 3.7	
		リスニング(50点)	522,950	30.8	516,429	35.4	6,521	▲ 4.6	
		筆+リ(200点換算)	—	114.6	—	121.2	—	▲ 6.7	
	ドイツ語	147	130.9	135	144.8	12	▲ 13.9		
	フランス語	140	151.0	142	148.3	▲ 2	2.8		
	中国語	482	158.0	427	158.6	55	▲ 0.6		
	韓国語	174	128.1	143	139.1	31	▲ 11.0		

<注>

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「28年－27年」と一致しない場合もある。  
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。
- ④ 27年「数学・理科」の「経過措置」科目受験者(旧課程履修者)について、新課程科目との対応が特定できないため、これらの受験者数は27年「数学・理科」の各科目受験者数に含まれていない。
- ⑤ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科②(発展科目間)における得点調整は、「生物」－「化学」の9.1点が最大で(地学は受験者数が1万人未満のため対象外)、実施されなかった。

旺文社 教育情報センター(平成28年2月4日)



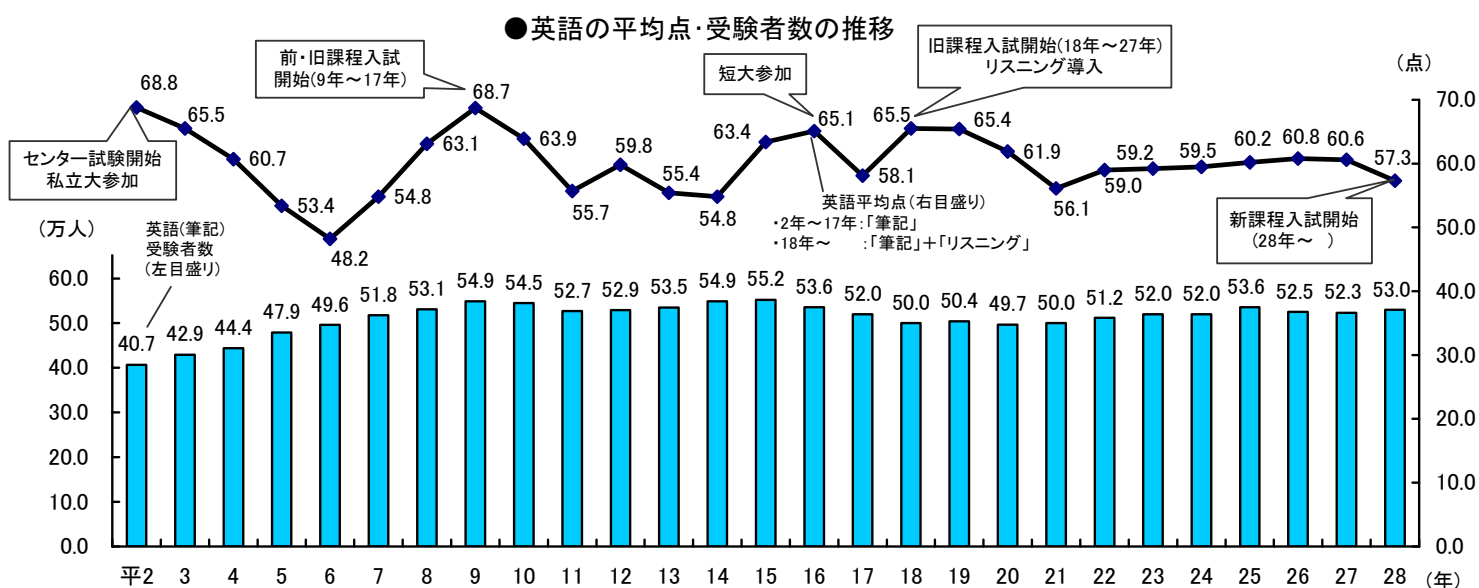
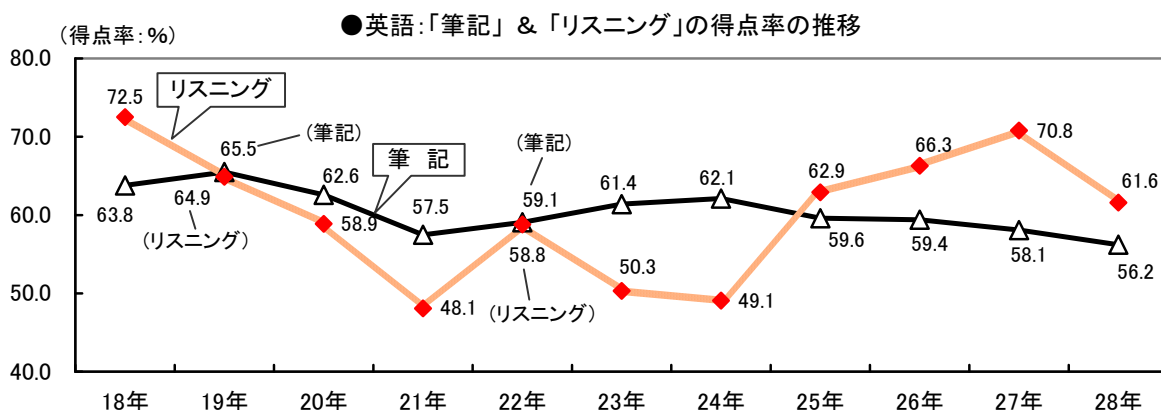
## ■英語;筆記-3.7点、リスニング-4.6点で、「筆記+リスニング」は6.7点ダウン!

◎ 28年の英語の平均点は筆記が3.7点ダウン、リスニングが4.6点ダウンし、全体(筆記+リスニング:250点満点を200点満点に圧縮換算)では6.7点ダウンの114.6点だった。

平成2(1990)年のセ試開始から28年までの英語の平均点(2年~17年までは筆記のみ、18年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、6年にこれまで最低の96.4点(得点率48.2%)を記録した後、V字回復を果たし、得点率はほぼ5割台半ば~6割台を推移。最近は、25年120.5点(得点率60.2%)→26年121.6点(同60.8%)→27年121.2点(同60.6%)と6割台をキープしていたが、28年は114.6点(同57.3%)で、4年ぶりに6割を割った。

◎ 筆記は、21年に115.0点(200点満点、得点率57.5%)と6割を割った後、24年124.2点(同62.1%)まで上昇したが、25年119.2点(同59.6%)→26年118.9点(同59.4%)→27年116.2点(同58.1%)→28年112.4点(同56.2%)と、4年連続ダウンした。

一方、リスニングは、18年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、21年の24.0点(同48.1%)まで、3年連続で急降下。22年は上昇(29.4点、得点率58.8%)したが、23年・24年と2年連続ダウン。25年(31.5点、同62.9%)は3年ぶりの上昇に転じ、26年(33.2点、同66.3%)→27年(35.4点、同70.8%)と3年連続アップしたが、28年は30.8点(同61.6%)で、4年ぶりにダウンした。



注. ① 折れ線グラフは、平成2年~17年における「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)+「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点を100点満点に圧縮換算)を表示。 ② 棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

■ **国語**; 平均点は+10.2 点の 2 年連続アップで、8 年ぶりに得点率 60%台を回復!

◎ 例年、セ試では英語に次いで受験者の多い国語について、前回の旧課程入試の始まった 9 年～28 年までの平均点(200 点満点を 100 点満点に換算)と受験者数、及び共通 1 次試験も含めた得点率の推移を下図に示した。

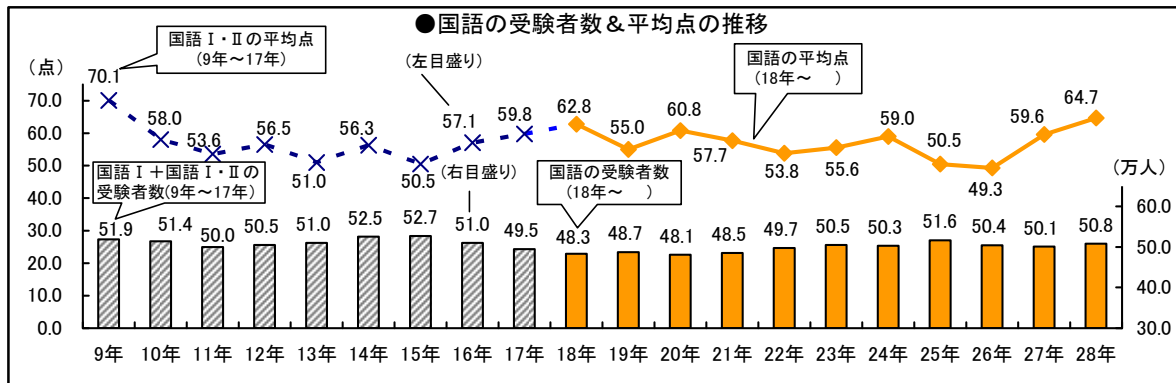
◎ 9 年の国語 I・II (9 年～17 年までは、国語 I と国語 I・II の 2 科目。受験者数は圧倒的に国語 I < 国語 I・II) の平均点は 140.2 点と高得点であったが、10 年には大幅にダウン。その後は 100 点台～110 点台のアップ・ダウンを繰り返し、15 年には 101.1 点の低得点を記録。

24 年は得点率を 60%直前まで回復していたが、25 年は現代文の難化で、それまでの最低点(15 年の 101.1 点)より若干低い 101.0 点となった。26 年は、古文の難化などで平均点は 98.7 点まで下降。共通 1 次試験(昭和 54<1979>年～平成元年<1989>年: 11 回実施)とセ試(平成 2 年～)を通して初めて平均点が 50%を割り、過去最低となった。

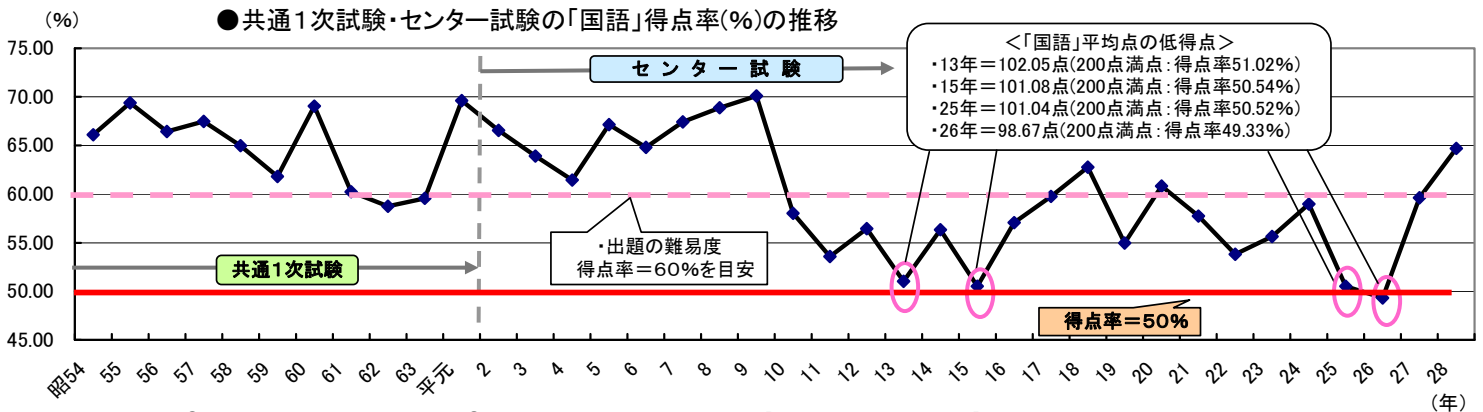
◎ 27 年は、平均点が前年より 20.6 点の大幅アップとなり、得点率も 59.6%まで回復。28 年も 10.2 点の大幅アップで、得点率は 64.7%と、8 年ぶりに 60%台に達した。

◎ 国語の得点率は、概して「共通 1 次」時代と「セ試」時代の前半(平成 9 年まで)はほぼ 60%以上(昭和 62・63 年はわずかに 60%割れ)の高得点率、それ以降は、ほぼ 50%台半ば～後半で推移。しかし、25・26 年は急落し、27・28 年で V 字回復を示している。

因みに、「共通 1 次」時代における国語の得点率の平均は 64.9%で、得点率 60%未満の試験は 11 回中、2 回のみである。一方、「セ試」時代の国語の得点率の平均は 28 年時点で 59.3%となり、得点率が 60%未満だった試験は 27 回中、16 回に及ぶ。



注 1. 前・旧課程入試(9年～17年)は、国語 I 及び国語 I・II の 2 科目出題。旧課程(18年～27年)及び新課程(28年～)入試では、国語 1 科目のみの出題。  
2. 200 点満点を 100 点満点に換算。



注 ① 「国語」平均点の得点率を示す。 ② 昭和54(1979)年～平成元(1989)年は「共通1次試験」、2年以降は「センター試験」。  
③ 9年～17年の前・旧課程入試では、「国語 I」「国語 I・国語 II」の2科目出題。ここでは、「国語 I・国語 II」の得点率を示す。

■**数学**；**数学Ⅰ・A**の平均点は**-6.0**点の**55.3**点、**数学Ⅱ・B**は**+8.6**点の**47.9**点！

◎ 数学は27年から新課程に沿って先行実施され、出題範囲・内容は新しい学習指導要領に対応して変更されたが、平均点等の経年比較は新・旧課程の同一名称の科目間でみる。

ただ、27年の「経過措置」による旧課程「数学」の平均点は除く。

セ試開始(2年)以降、28年までの27回に及ぶ**数学Ⅰ・A**(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、**数学Ⅱ・B**(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ **数学Ⅰ・A**(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

一方、**数学Ⅱ・B**(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点をみると、新課程初年度となった27年の39.3点、最高点は6年の77.2点で、その較差は37.9点に達する。

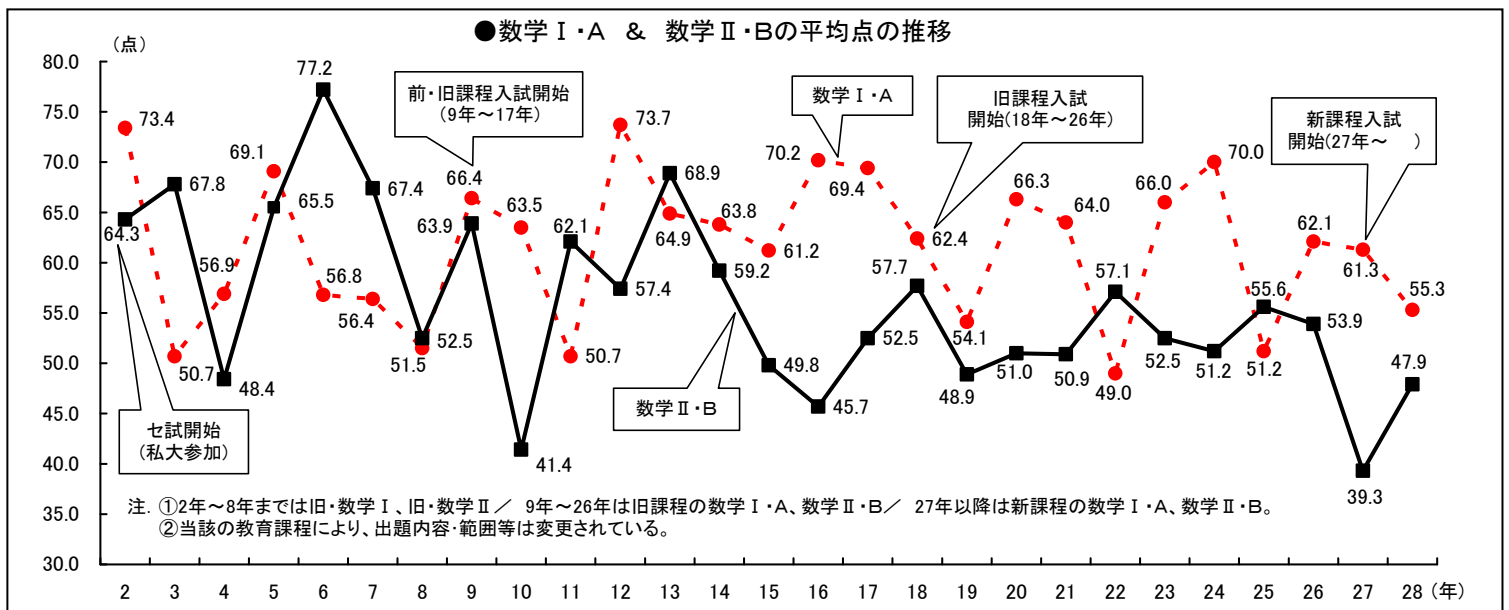
◎ **数学Ⅱ・B**の平均点は28年も含め、過去27回の試験(本試験)で50点未満が6回もあって変動幅も大きいのに対し、**数学Ⅰ・A**の平均点50点未満は22年の1回のみである。

**数学Ⅱ・B**は出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、**数学Ⅰ・A**に比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

◎ 最近の**数学Ⅰ・A**の平均点は、22年にこれまで唯一の50点割れとなった49.0点まで急落し、13年以来9年ぶりに**数学Ⅱ・B**を下回った。その後、23年・24年と2年連続上昇して**数学Ⅱ・B**を上回った。25年は大幅ダウンで**数学Ⅱ・B**を下回ったが、26年は大幅アップ、27年・28年は2年連続ダウンしたものの、3年連続で**数学Ⅱ・B**を上回った。

一方、**数学Ⅱ・B**は、22年に**数学Ⅰ・A**を上回ったが、23年・24年と2年連続ダウンした。25年は3年ぶりに上昇して**数学Ⅰ・A**を上回ったが、26年・27年ともダウンして**数学Ⅰ・A**を下回った。特に、27年は平均点39.3点と、過去最低であった。

28年は8.6点アップで平均点は47.9点まで上昇し、**数学Ⅰ・A**と**数学Ⅱ・B**の平均点差は27年の22.0点差(**数学Ⅰ・A**>**数学Ⅱ・B**)から、4.4点差まで縮小した。



**□数学2科目受験は、「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」が約35万3,000人で、2科目受験者の97.9%!**

◎ 28年の数学(数学①と数学②)の実受験者数は39万9,567人。そのうち、「1科目受験者」数は3万9,310人(実受験者数に占める構成率9.8%)、「2科目受験者」数は36万257人(同90.2%)である。

他方、数学①と数学②の延べ受験者数は75万9,824人。そのうち、数学①の「数学Ⅰ・A」の受験者数は39万2,580人(延べ受験者数に占める構成率51.7%)、数学②の「数学Ⅱ・B」の受験者数は35万3,534人(同46.5%)である。

また、数学①と数学②の「2科目受験者」(実受験者数36万257人)のうち、97.9%を占める35万2,645人が「数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B」を受験している。

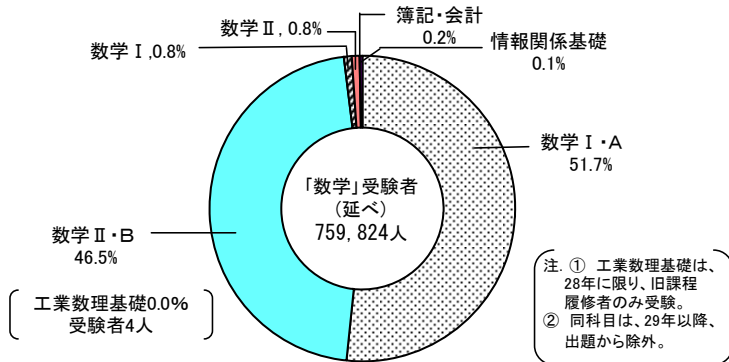
◎ ところで、27年は前述したように「経過措置」が講じられ、旧課程「数学」の旧数学Ⅰ、旧数学Ⅰ・A、旧数学Ⅱ・Bが旧課程履修者用に出題された。そのため、27年と28年の「数学」全体の受験者数などを比べる際は、27年の旧課程科目受験者もみる必要がある。

27年の旧課程科目受験者と新課程科目受験者の合計実受験者数は39万8,648人であった。

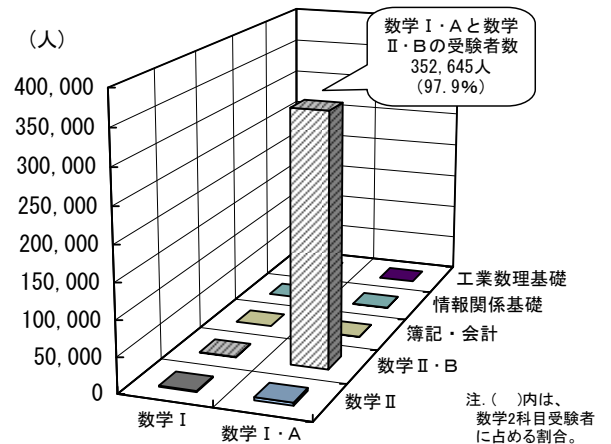
したがって、28年の実受験者数が27年より919人、0.2%増加した。

また、27年の「数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B」(新課程)の構成率83.5%と「旧数学Ⅰ・A+旧数学Ⅱ・B」(旧課程)の構成率13.9%を合わせると97.4%となり、28年の「数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B」の構成率が0.5ポイント上回っている。

●「数学」延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●数学2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



●「数学」2科目受験者: 360,257人の内訳

数 学		数 学 ②				
		数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	簿記・会計 (人)	情報関係基礎 (人)	工業数理基礎 (人)
①	数学Ⅰ	1,683 (0.5%)	672 (0.2%)	262 (0.1%)	65 (0.0%)	0 (0.0%)
	数学Ⅰ・A	4,047 (1.1%)	352,645 (97.9%)	481 (0.1%)	399 (0.1%)	3 (0.0%)

注: ( )内は、「数学」2科目受験者に占める割合。

■ **地歴・公民**；「地歴」B科目は平均点“アップ”、「公民」現社・倫理は平均点“ダウン”／  
 [地歴、公民]2科目受験者は約3,900人(2.7%)“増加”の約14万5,000人！

□ **地歴と公民の受験者動向等**

◎ **地歴・公民の試験枠**

地歴と公民の試験枠は統合されており、[地歴、公民]([ ])は試験枠を示す。以下、同の全10科目から最大2科目の選択が可能である。

ただし、日本史Aと日本史Bなど、同一名称を含む科目同士の組合せ・選択はできない。

◎ **平均点“アップ”は日本史B・世界史B・政経など、“ダウン”は現社・倫理など**

地歴の平均点は、日本史B+3.5点(得点65.6点)、世界史B+1.6点(同67.3点)、地理B+1.5点(同60.1点)など、受験者の多い“B科目”はアップした。

公民は例年、公民の中で受験者数の一番多い現代社会(本試験受験者数：8万240人)が-4.5点(同54.5点)と、やや大きくダウンした。また、倫理も-1.6点(同51.8点)で、前年の“過去最低”を更新した。

政治・経済は+5.2点(同60.0点)と、やや大きくアップ。「倫理、政治・経済」(以下、倫政経)は+0.9点(同60.5点)で、前年並みであった。

◎ **地歴の受験者数は約6,400人(1.7%)“増加”、公民は約2,500人(1.3%)“増加”！**

セ試の全受験者数(53万6,828人。追・再試験含む)が27年より1.2%増加した中、地歴の実受験者数(追・再試験含む)は、27年より6,353人(前年比1.7%)増の38万2,080人。全受験者数に占める地歴の「受験選択率」は、27年より0.4ポイント上昇の71.2%である。

他方、公民の受験者数は、27年より2,521人(同1.3%)増の20万1,034人だった。

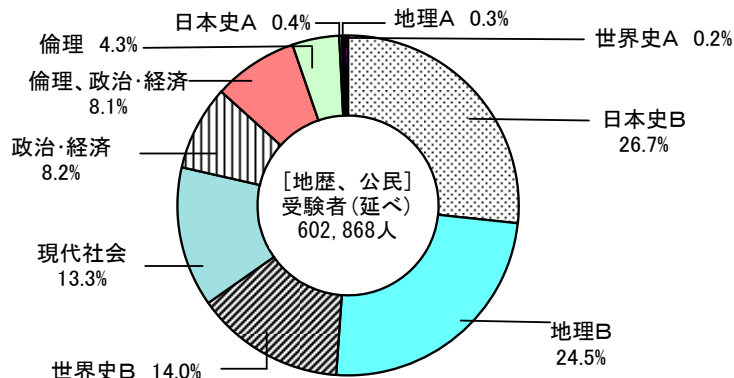
ところで、27年の受験者数は26年に比べ、地歴は前年並み(0.1%増)、公民は減少(3.4%減)であったが、28年は地歴・公民ともセ試の受験者増に見合う増加率であった。

なお、地歴と公民の延べ受験者数は、27年より9,344人(前年比1.6%)増の60万2,868人である。

◎ **地歴と公民の各科目受験者が軒並み増加した中、倫理は“大幅減”！**

地歴と公民の各科目受験者数(本試験)は、地歴の地理A(前年比2.1%減)と公民の倫理(同15.3%減)以外、すべて増加した。特に、倫理の大幅減は、前年の平均点が過去最低(53.4点)になったことへの敬遠とみられる。

● [地歴、公民] 延べ受験者の構成比率 (追・再試験含む)





◎「第1解答科目」と「第2解答科目」

地歴、公民の試験枠である[地歴、公民]、及び理科「発展科目」の試験枠である理科②では、それぞれ最大2科目の選択・受験が可能である。

志望大学のセ試利用が“1科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命1科目”に絞って「2科目選択・受験」(2科目試験枠)を「事前登録」し、“本命1科目”の解答に最大2倍近い解答時間(120分程)を掛けることが可能である。つまり、2科目受験者は「第1解答科目」の解答時間を、「第2解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした、解答時間の“不公平”を是正する観点から、全ての国立大と大半の公立大、一部のセ試利用私立大では、“2科目試験枠”の受験者が“1科目利用指定”の学部等に出願した場合、「高得点科目」ではなく、「第1解答科目」の成績を合否判定に用いる。

□ [地歴、公民]“2科目受験”の状況

◎ 地歴と公民の2科目の実受験者数(追・再試験含む)は、27年より3,861人(前年比2.7%)増の14万5,262人である。2科目受験者の増加は、セ試受験者の増加に加え、文系志望者の受験が増えたことなどによるとみられる。

試験枠[地歴、公民]の10科目(地歴A=3科目、地歴B=3科目、公民=4科目)から2科目を選択・受験する組合せは、全部で40通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1)「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約12万5,000人、86.4%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、27年より3,384人(前年比2.8%)増の12万5,465人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合86.4%)で、2科目受験者の9割近くを占める。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が12万3,681人(同85.1%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Bと現代社会の組合せが2万7,091人(同18.6%)／日本史Bと倫政経の組合せが1万6,571人(同11.4%)／日本史Bと政治・経済の組合せが1万5,306人(同10.5%)などとなっている。

①「地歴B科目」×「公民」受験：123,681人(85.1%)の内訳

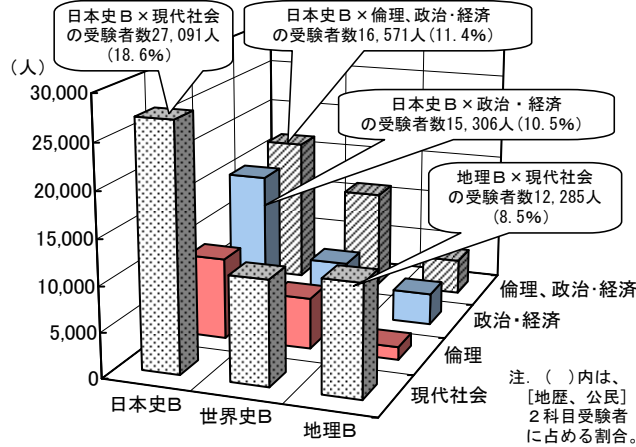
		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史B	27,091 (18.6%)	9,036 (6.2%)	15,306 (10.5%)	16,571 (11.4%)
	世界史B	11,503 (7.9%)	5,674 (3.9%)	6,087 (4.2%)	11,167 (7.7%)
歴	地 理B	12,285 (8.5%)	1,412 (1.0%)	3,565 (2.5%)	3,984 (2.7%)

②「地歴A科目」×「公民」受験：1,784人(1.2%)の内訳

		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史A	424 (0.3%)	83 (0.1%)	284 (0.2%)	38 (0.0%)
	世界史A	267 (0.2%)	86 (0.1%)	84 (0.1%)	24 (0.0%)
歴	地 理A	304 (0.2%)	39 (0.0%)	138 (0.1%)	13 (0.0%)

注。( )内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」 × 「公民」 受験者の内訳 (追・再試験含む)



(2) 「地歴」 2科目受験：約1万6,600人、11.4%

24年セ試から導入されている、地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が27年より303人(前年比1.9%)増の1万6,608人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合11.4%)である。

ただ、受験者数は増加したものの、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合は0.1ポイント下降した。また、「地歴B」科目同士の2科目受験者は、27年より315人(前年比2.0%)増の1万6,251人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合11.2%)に増えた。

「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、日本史Bと世界史Bの組合せが6,691人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合4.6%)／世界史Bと地理Bの組合せが6,417人(同4.4%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが3,143人(同2.2%)となっている。

① 「地歴B科目」 × 「地歴B科目」 受験：16,251人(11.2%)の内訳

地歴	地歴	
	世界史B(人)	地理B(人)
日本史B	6,691 (4.6%)	3,143 (2.2%)
世界史B	—	6,417 (4.4%)

注. ( )内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

② 「地歴A科目」 × 「地歴A科目」 受験：138人(0.1%)の内訳

地歴	地歴	
	世界史A(人)	地理A(人)
日本史A	72 (0.0%)	26 (0.0%)
世界史A	—	40 (0.0%)

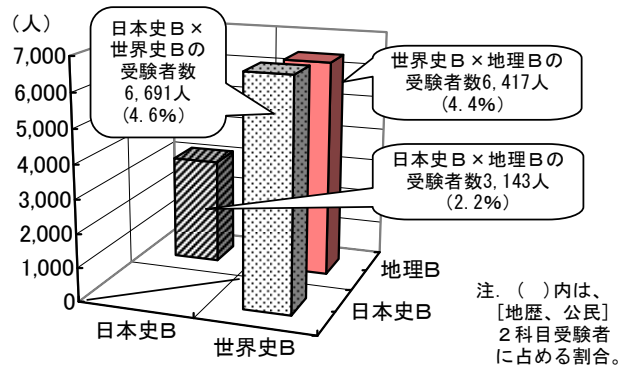
注. ( )内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

③ 「地歴A・B科目」 × 「地歴A・B科目」 受験：219人(0.2%)の内訳

地歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目 × 世界史B	49(0.0%)
	B科目 × 世界史A	68(0.0%)
世界史	A科目 × 地理B	43(0.0%)
	B科目 × 地理A	19(0.0%)
地理	A科目 × 日本史B	24(0.0%)
	B科目 × 日本史A	16(0.0%)

注. ( )内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(3) 「公民」2科目受験：約3,200人、2.2%

「公民」同士2科目の組合せは4通りで、受験者は27年より174人(前年比5.8%)増の3,189人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合2.2%)である。

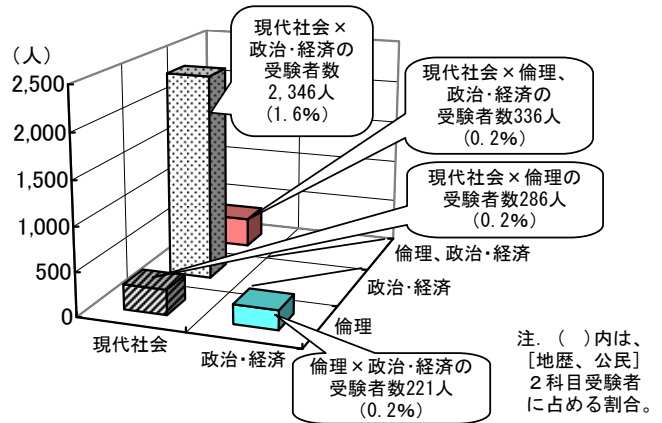
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが2,346人(同1.6%) / 倫政経との組合せが336人(同0.2%) / 倫理との組合せが286人(同0.2%)などである。

● 「公民」4科目から2科目受験：3,189人(2.2%)の内訳

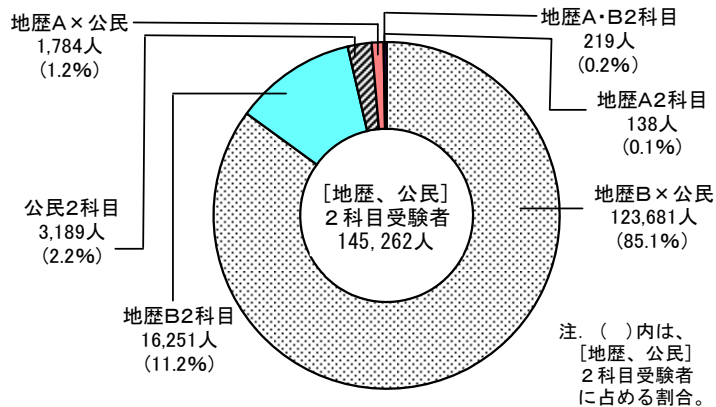
公民	公民		
	倫理(人)	政治・経済(人)	倫理、政治・経済(人)
現代社会	286 (0.2%)	2,346 (1.6%)	336 (0.2%)
政治・経済	221 (0.2%)	—	—

注. ( )内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

● 「公民」2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



● [地歴、公民] 2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



- **理科**；「基礎科目」受験者約 15 万 2,000 人、「発展科目」受験者約 25 万人！  
「選択パターン」別受験者比率：A=35%、B=9%、C=5%、D=51%！

□ 「理科」の選択解答方法

27 年から新課程に対応して実施している「理科」は、物理・化学・生物・地学の 4 領域の各「基礎科目」（標準 2 単位）を理科①に、各「発展科目」（標準 4 単位）を理科②に配置し、全 8 科目を次のような A～D の“4 パターン”のいずれかによって選択解答する。

- A = 「基礎 2 科目」：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から 2 科目選択解答。  
（4 単位相当）
- B = 「発展 1 科目」：物理、化学、生物、地学から 1 科目選択解答。（4 単位相当）
- C = 「基礎 2 科目 + 発展 1 科目」：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から 2 科目、及び物理、化学、生物、地学から 1 科目選択解答。  
（3 科目選択解答：8 単位相当）
- D = 「発展 2 科目」：物理、化学、生物、地学から 2 科目選択解答。（8 単位相当）

◎ 選択解答の留意事項

- 「発展科目」については、旧課程で“選択履修”であった学習項目が新課程では“必修化”されたが、受験者の大幅な負担増にならないように“一部に選択問題”が配置されている。
- 理科①(基礎科目：50 点満点)については、“1 科目のみの受験は認められない”。  
試験時間は 2 科目で 60 分。
- 理科②(発展科目：100 点満点)の試験時間において 2 科目を選択する場合、解答順に「第 1 解答科目」及び「第 2 解答科目」に区分して各 60 分間で解答する。「第 1 解答科目」と「第 2 解答科目」の間の答案回収等の時間を含め、合計時間(130 分)が試験時間となる。
- 選択解答方法(A～D)は、出願時に「事前登録」する。
- 選択解答方法 C における「基礎科目」と「発展科目」の組合せで、同一名称を含む科目同士の選択については制限されず、同一名称を含む科目同士の選択は可能である。  
ただし、セ試を利用する大学(学部)によっては、「基礎科目」と「発展科目」における同一名称を含む科目の組合せを不可としているところがある。  
因みに、地歴と公民では、同一名称を含む科目の組合せで 2 科目選択はできない。
- \* なお、27 年セ試に限り、旧課程履修者(既卒者)用に旧課程科目の理科総合 A、理科総合 B、物理 I、化学 I、生物 I、地学 I が理科②の試験枠に「経過措置」として配置されたが、28 年から「経過措置」は講じられない。

□ 受験者の動向

◎ 理科①の受験状況

(1) 「基礎科目」受験者：約 15 万 2,000 人、「理科」受験者の 39.7%

理科①の「基礎科目」の実受験者数は 15 万 2,471 人で、理科の実受験者数 38 万 3,781 人(A～D パターンの受験者合計)の 39.7%である。

28 年の「基礎科目」の実受験者数は、前年に比べ 2 万 2,547 人、17.4%の大幅増となった。これは、27 年の「経過措置」で旧課程科目を受験した“文系志望者に相当する層”が「基礎科目」を受験したためとみられる。

(2) 「基礎科目」の科目別選択率：生物基礎 43.8%、化学基礎 34.7%

理科①の「基礎科目」の延べ受験者数 30 万 5,018 人の受験状況は、次のとおりである。

生物基礎は受験者数 13 万 3,666 人、理科①の延べ受験者数に占める割合 43.8% / 化学基礎は 10 万 5,949 人、同 34.7% / 地学基礎は 4 万 7,096 人、同 15.4% / 物理基礎は 1 万 8,307 人、同 6.0% で、「基礎科目」受験は生物基礎と化学基礎が中心となっている。

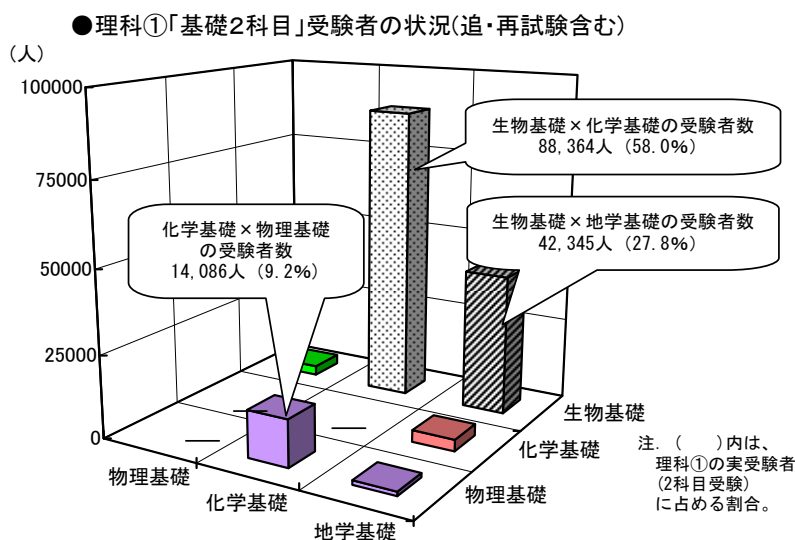
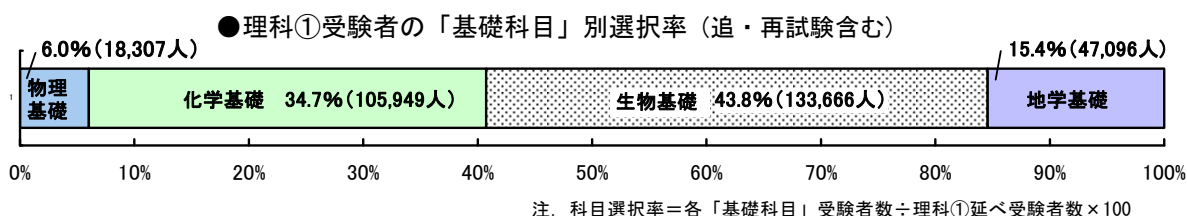
(3) 「基礎 2 科目」の組合せ：

「生物基礎＋化学基礎」58.0% / 「生物基礎＋地学基礎」27.8% など、“文系色” 反映！

「基礎科目」は“2 科目受験が必須” となっており、受験科目の組合せ状況は、次のとおりである。

「生物基礎＋化学基礎」は受験者数 8 万 8,364 人、科目選択率 58.0% (理科①の実受験者数に占める割合) / 「生物基礎＋地学基礎」は受験者数 4 万 2,345 人、同 27.8% / 「化学基礎＋物理基礎」は受験者数 1 万 4,086 人、同 9.2% など。

「基礎科目」は、生物基礎を中心に化学基礎や地学基礎との組合せが主体で、前年同様、“文系志望者” 受験を反映した結果となっている。



●理科①：「基礎 2 科目」受験者数 152,471 人の科目選択内訳（追・再試験含む）

	理科①			
	物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理科①	—	14,086 (9.2%)	2,925 (1.9%)	1,273 (0.8%)
理科①	—	—	88,364 (58.0%)	3,478 (2.3%)
理科①	—	—	—	42,345 (27.8%)

注. ( )内は、「基礎 2 科目」実受験者に占める割合。

◎ 理科②の受験状況

(1) 「発展科目」受験者：約 25 万人、「理科」受験者の 65.3%

理科②に配置された「発展科目」の実受験者数は 25 万 438 人で、27 年の理科②の実受験者数 26 万 9,948 人(新課程科目受験者 21 万 2,304 人+旧課程科目受験者 5 万 7,644 人)に比べ、1 万 9,510 人(7.2%)の減少となる。これは、前述したように、前年「経過措置」で理科②の旧課程科目を受験した文系志望者に相当する層が理科①に移ったためとみられる。

ただ、「理科」全体の実受験者数(38 万 3,781 人)に占める「発展科目」の実受験者数の割合は 65.3%で、理科受験者の 2 / 3 に及ぶ。

(2) 「発展科目」の延べ受験者の構成比：

「化学」受験 47.4%、「物理」受験 34.8%、「生物」受験 17.3%など、“理系色”反映！

「発展科目」の延べ受験者数 44 万 7,071 人の各科目の構成比率は、次のとおりである。

化学 47.4%(受験者 21 万 1,744 人) / 物理 34.8%(同 15 万 5,774 人) / 生物 17.3%(同 7 万 7,423 人) / 地学 0.5%(同 2,130 人)。

各科目の構成比率を 27 年と比べると、化学が 0.6 ポイント上昇、物理が 0.3 ポイント上昇したのに対し、生物が 0.9 ポイント下降し、地学は変わらなかった。「発展科目」は旧課程の「理科 I 科目」よりも一段と理系志望者を中心にして、化学や物理の科目選択の比率が高まっていることが伺える。

◎ 「選択パターン」別受験状況

(1) セ試「理科」受験者の“2人に1人”は、「発展2科目」の“Dパターン”！

セ試「理科」は、前述のようにA～Dの4パターンからの選択受験となる。

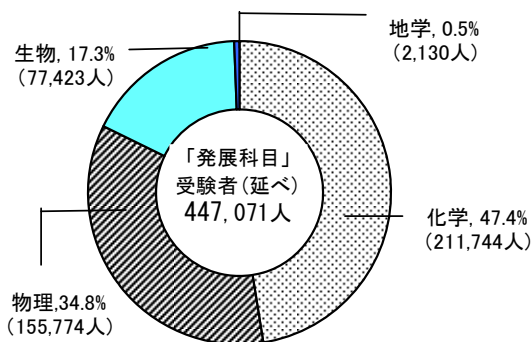
28年の各「パターン」別受験者の4パターン実受験者数 38 万 3,781 人に占める割合は、次のとおりである。

Aパターン：34.7%(受験者数 13 万 3,343 人) / Bパターン：9.0%(同 3 万 4,677 人) / Cパターン：5.0%(同 1 万 9,128 人) / Dパターン：51.2%(同 19 万 6,633 人)。

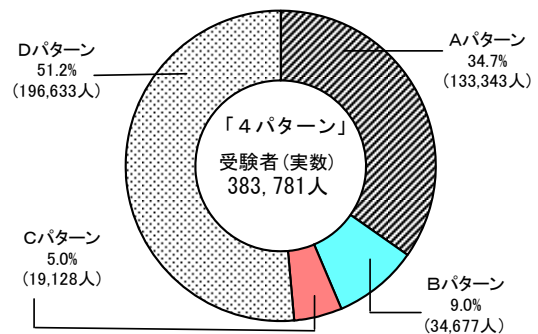
セ試「理科」受験者の“2人に1人”が「発展2科目」(8単位相当)の“Dパターン”を受験していることが注目される。

また、看護・医療系などにみられる“Cパターン”(基礎2科目+発展1科目：8単位相当)は、5%に留まっている。

●理科②「発展科目」延べ受験者の構成比率 (追・再試験含む)



●理科「選択パターン」別受験状況 (追・再試験含む)



(2) A : 「生物基礎＋化学基礎」主体 / B : 物理、化学、生物の1科目選択比率ほぼ“均等”  
 C : 「生物基礎＋化学基礎＋生物」主体 / D : 「化学＋物理」主体

A～Dの各パターンの科目選択の内訳をみると、およそ次のようになっている。

Aパターンは、「生物基礎＋化学基礎」が60%近くで主体/Bパターンは物理、化学、生物の1科目選択比率がそれぞれ30%台でほぼ均等/Cパターンは、「生物基礎＋化学基礎＋生物」が40%強で主体となっている。また、Dパターンは「化学＋物理」が70%強、「化学＋生物」が30%近くである。

●Aパターン：実受験者数133,343人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理 科	物理基礎	—	8,696 (6.5%)	2,152 (1.6%)	1,104 (0.8%)
	化学基礎	—	—	<b>77,377 (58.0%)</b>	2,981 (2.2%)
	① 生物基礎	—	—	—	<b>41,033 (30.8%)</b>

注. ① 理科①(基礎科目)から2科目を選択受験。  
 ② ( )内は「Aパターン」の実受験者に占める割合。  
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Bパターン：実受験者数34,677人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理 科 ②			
物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
<b>11,858 (34.2%)</b>	<b>11,517 (33.2%)</b>	<b>11,034 (31.8%)</b>	268 (0.8%)

注. ① 理科②(発展科目)から1科目を選択受験。  
 ② ( )内は「Bパターン」の実受験者に占める割合。  
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Cパターン：実受験者数19,128人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①					
		物 理 基 礎			化 学 基 礎		生 物 基 礎
		化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	地学基礎(人)
理 科	物 理	<b>2,589 (13.5%)</b>	219 (1.1%)	101 (0.5%)	430 (2.2%)	80 (0.4%)	16 (0.1%)
	化 学	<b>2,345 (12.3%)</b>	423 (2.2%)	43 (0.2%)	<b>2,520 (13.2%)</b>	94 (0.5%)	144 (0.8%)
	生 物	438 (2.3%)	125 (0.7%)	5 (0.0%)	<b>7,867 (41.1%)</b>	277 (1.4%)	661 (3.5%)
	地 学	18 (0.1%)	6 (0.0%)	20 (0.1%)	170 (0.9%)	46 (0.2%)	491 (2.6%)

注. ① 「理科①(基礎科目)から2科目＋理科②(発展科目)から1科目」の選択受験。  
 ② ( )内は「Cパターン」の実受験者に占める割合。  
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Dパターン：実受験者数196,633人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ②			
		物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
理 科	物 理	—	<b>138,942 (70.7%)</b>	1,124 (0.6%)	415 (0.2%)
	化 学	—	—	<b>55,456 (28.2%)</b>	260 (0.1%)
	② 生 物	—	—	—	436 (0.2%)

注. ① 理科②(発展科目)から2科目を選択受験。  
 ② ( )内は「Dパターン」の実受験者に占める割合。  
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

## □ 「理科」平均点

### ◎ 前年高得点の化学基礎、化学が“大幅ダウン”、低得点の生物が“大幅アップ”！

文系志望者の受験が多い「基礎科目」の平均点(50点満点)を得点率で見ると、物理基礎 68.7%、化学基礎 53.5%、生物基礎 55.2%、地学基礎 67.8%である。

前年高得点の化学基礎(27年:35.3点、得点率 70.6%)の 8.5 点の大幅ダウン(得点率 17.1 ポイント低下)と、地学基礎(27年:27.0点、得点率 54.0%)の 6.9 点の大幅アップ(得点率 13.8 ポイント上昇)が目立つ。

他方、「発展科目」の平均点(100点満点)は、物理 61.7 点、化学 54.5 点、生物 63.6 点、地学 38.6 点である。

前年高得点の化学(27年<「得点調整」後の得点。以下、同>:62.5点)は 8.0 点の大幅ダウンで 54.5 点、物理(同 64.3 点)は 2.6 点ダウンの 61.7 点だった。前年、低得点で「得点調整」の基になった生物(同 55.0 点)は 8.6 点の大幅アップで 63.6 点だった。

なお、地学(同 40.9 点:受験者数 1 万人未満で「得点調整」対象外)は、前年より 2.3 点ダウンの 38.6 点で、共通 1 次時代(昭和 54<1979>年~平成元<1989>年)を含め、前年の“過去最低”を更新した。

## □ 27 年「経過措置」による受験者数の見方

### ◎ 「旧科目」出題なく、「新科目」受験者数“大幅増”！

前述したように、28 年セ試は前年の数学・理科で講じられた「経過措置」(旧課程履修者用に旧課程科目を出題)がなくなり、全て新課程科目による実施となった。

そのため、各科目における 28 年受験者数と前年受験者数との比較において、前年の旧課程科目受験者が新課程のどの科目受験に相当するかを特定するのが難しい。

ただ、数学は新課程と旧課程で履修内容、出題範囲等の変更はあったものの、セ試の出題科目名や実施方法の変更はなく、新・旧各科目の受験者層に大きな違いはなかったとみられる。

一方、理科は新課程と旧課程で履修科目の構成、単位数、履修内容等が大幅に変わり、それに伴い、セ試「理科」の出題科目、実施方法等が複雑・多様化した。そのため、旧課程科目受験者の新課程科目との対比はできない。

因みに、本稿の 3 ページに掲載した「セ試平均点等一覧」では、27 年「数学・理科」の「経過措置」科目受験者のデータを除いてある。

こうしたことから、理科の 28 年各科目の受験者数は、前年(新課程科目)に比べ、地学(発展科目)を除き、約 13%~約 38%の大幅増となっている。